

## 5 下呂市萩原町地域の民話

### (5-1) ダンゴ淵とイワナ

#### ①話の内容

ある日、村人の家にお坊さんがきて「休ませてほしい。」と言う。お坊さんが何も食べていないと思った村人はソバダンゴを温めてあげた。すると、温めたのを食べず冷えたダンゴをうまそうに食べた。食べたダンゴの数を数えたら 20 個も食べていた。村人が鍋を食べようとしたら、坊さんがサンショのにおいに顔をしかめていた。坊さんは村人たちに「ネモミにいくんじゃな。」と恐ろしい目で言われた。ネモミとは、サンショの根でネとよばれる薬を作り、このネを使って魚を捕る漁法である。坊さんの勢いにおされた村人は鍋を下ろした。それから、坊さんは安心した様子で、ダンゴを食べ終わると、礼を言い、闇の中に消えていった。

翌日、村人たちは川でネモミをした。あれよあれよと魚があがってきた。それを捕まえ見たら、とてつもない大きいイワナが一匹いた。村に帰って、でっかいイワナの腹を切ったら、出てきたのは 20 個のダンゴだった。若者たちがタベお坊さんが食べたソバダンゴの数と一緒に、ぶるぶる震えあがった。それ以来、イワナは人間に化けると言われ、この淵は「ダンゴ淵」と呼ばれた。(『萩原のむかし話』)

#### ②取材調査

「ダンゴ淵」は萩原町山之口地区から位山峠に向かう旧官道（位山官道）の脇にある。このあたりは山あいにあって雨量が多く、基準雨量を超え、落石などの危険からしばしば交通制限が行われる場所である。

かつては多くの人や物が往来した道だったのだろうが、現在はひっそりとした場所となっている。高山市との境にある位山や船山の水が水量の多いカジヤ谷をつくっている。この谷水が山之口地区に入る手前にダンゴ淵があった。



位山官道跡(7月30日下呂市萩原町)



ダンゴ淵 (7月30日下呂市萩原町)

#### ③研究・考察

「ダンゴ淵とイワナ」の話のように、お坊さんに化けたイワナがダンゴを食べて…という話は、久々野町や小坂町にも伝えられている。

久々野町の話は、「池谷の青どん淵」が舞台になっている。

久須母の与作夫婦が「ねもみ」の準備をしていると、僧がやってきて食べ物を恵んでくれと言う。「ねもみ」をとがめた僧に、初午団子を食べてもらおうとすすめると、20個も食べた後、家を出て行き、青どん淵に消えて行った。翌日与作夫婦が「ねもみ」をして魚を取っていると、大きな岩魚が浮いてきた。岩魚の腹を切ると、腹から団子が20個出てきたというものである。

また、小坂町の話は大島の淵が舞台である。

ある日の夜のこと、庄右衛門の家では家族揃って、初午団子を作っていた。すると、どこから来たか一人の旅僧が戸口に立っていた。少し休ませてほしいというので炉辺へ招いた。団子を作るのを見ていた旅僧は少しください、と言うので心よく差し出した。旅僧は一つも残らず、普通の人間とは思えない早さで食べた。やがて旅僧は礼もそこそこに庄右衛門の家を出た。あまりの大食いにおどろいた庄右衛門はあやしみながら旅僧のあとをついていくと谷下の淵のあたりで姿が消えていた。翌朝、昨夜の淵へ行ってみると大きな岩魚が死んでいた。岩魚を持ち帰り初午のごちそうにするつもりで腹をさくと中から出てきたのはすごい数のダンゴであった。というものである。

久々野と小坂の話に共通するのは、団子が初午団子であることだ。現在も初午の季節のころ溪流釣りが解禁となるが、農閑期で川漁に適した季節が話の背景にあるのだろうか。

ダンゴ淵を流れる川が山之口川になり、やがて益田川に合流する。合流地点の尾崎地区には「よのなか岩（けかち岩）」という話があった。これは季節風と雨、川との関係をあらわす話だ。

「川西村大字尾崎、山之口川と益田川の合流する下り川橋の下に、大きい岩が、上部を砂利の上へ、牛のねたほど出している。これが世の中岩である。…」

「…北西より降りはじめた雨は、上りが早く、東北の雨は上がりが悪い。つまり、長雨となり、冷気が伴い不作になる。従って北西より降り出した雨は、一時は大荒れとなっても、雨上りが早くて豊作となる。つまり西が荒れたときは、山之口川が氾濫して岩が埋まり豊作、東が荒れると益田川が氾濫して、この岩が露出して不作だというのである。」（『続川西村史』）

世の中岩の状態によって農業の出来不出来が予想できる話として興味深い。



池谷地区を流れる益田川  
(7月20日高山市久々野町)



世の中岩(8月23日下呂市萩原町)

## (5-2) 水よぶ鯉

### ①話の内容

昔、益田川は大雨が降ると洪水がおき、人々は大変な思いをしていた。ある年のこと、上呂の久津八幡さまの前の川岸も、荒れ狂う水に削られて、川がどんどん八幡さまの方へ押し寄せてきた。

村人たちからは「田畑も道も掘りとられてしまう」、「拝殿まで流されるかもしれない」という心配の声が上がり、みんなで川を眺めながら相談した。

弥作じいが「あの拝殿のひさしに彫りこんである鯉が水をよぶんやぞ。どうしても、そうとしか思えん。」と言い、信じてくれる人もいれば、反対の人もいた。言い争いも起こった。そこで弥作じいは、高山の里に住んでいる、水よぶ鯉を作った飛騨匠の和田さまにお願いをした。和田様は矢を作り、水よぶ鯉に向けて矢を取り付ければ、大水の心配はなくなると告げた。言いつけ通り、ひさしに取り付けると大水はなくなり、村は安らかになった。水よぶ鯉と矢の彫り物は今も大切に保存されている。(参考資料『萩原のむかし話』)

### ②取材調査

久津八幡神社氏子総代の二村豊さん(66歳)から話を聞きながら資料を見学した。

「拝殿の庇につけられた鯉や矢は、屋根を作る当初に埋め込んで作られたもので、昔話のように後から付けられたものではないと考えるのが妥当だ。なぜ取り付けたのかははっきりしていないが、当時の人たちが益田川の氾濫を恐れ、後から話を作り上げたのではないだろうか。」

「伝説の背景には、地域の人々の願いが込められている。このあたりの人たちは大変水害に苦しんだのではないだろうか。」



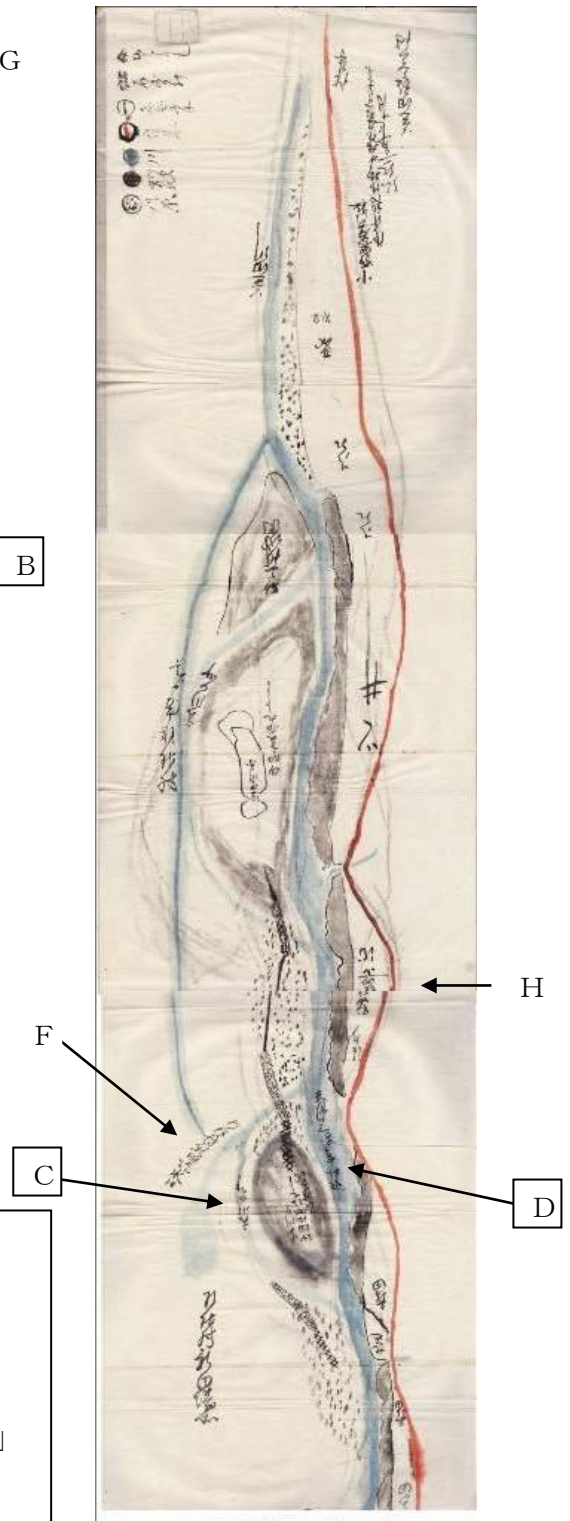
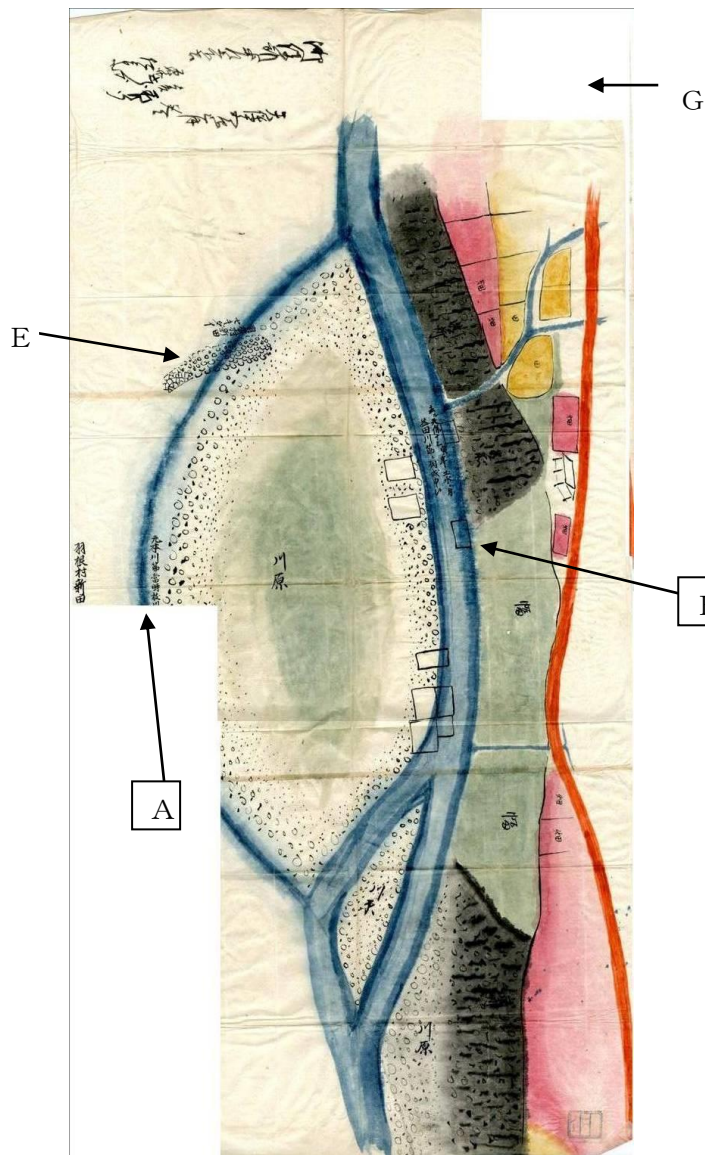
久津八幡神社境内(6月8日)



古い「水よぶ鯉」造作の見学  
(6月8日 久津八幡神社)

久津八幡神社に残る史料をみると、天保・弘化年間に記された益田川の図面には、天保十三年の出水による河川の変化と河川改修が行われたことが記されていた。この時の水害は「益田川大洪水の為居宅を押し流し、又は破損する等十軒に及ぶ。此他、川筋所々決壊せしも状況詳ならず。」と『益田郡誌』に記録されており、甚大な被害だったことがわかる。

しばしば洪水を繰り返す河川をうまく管理することが、農林漁業をはじめとする生活を営む当時の地域の人たちの願いであつと推測される。



天保年間に描かれた益田川上呂地域（左）と  
弘化年間に描かれた益田川上呂地域（右）  
（地図上部が北、益田川は北から南へ流れている）

- A** 「本元川筋」
- B** 「去ル天保十三寅年出水ニ付本川筋ニ相成申候」
- C** 「元川筋」
- D** 「天保十三年切込」

と記されており、本来の益田川の本流が東部へ変化したことが記されている。

E「羽根新田セキダイ」とあるのがFか。

現在の地域の地名が右図にもみられる（ツツイ、十八石など）。地名位置から、G・Hのあたりに久津八幡神社があったと推測できる。

### ③研究・考察

下の二枚の写真は久津八幡神社付近の同じ地点から撮影した益田川の様子である。数日の違いであるが、川の水量が大きく変わっていることがわかる。益田川上流域の水をダムに貯め、水力発電に利用するようにトンネルを通して下流域や別の河川に運ぶような技術がなかった昔は、もっと大きな水量の変化があり、特に増水時の河川管理は大変苦勞したことが想像できる。

萩原振興事務所の奥田達彦さんから「昔の人から、『川が動いた』とか『川が暴れる』といった話を聞いた」という話があった。物語ができた当時、この地域の人たちは益田川の氾濫を恐れ、なんとかしたいという願いをもっていたのだろう。また、そのことが現代につながる河川の改修やダム・橋梁の建設につながっていると考える。



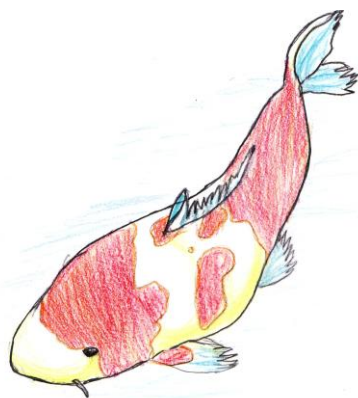
増水時の益田川(7月23日)



減水時の益田川(8月1日)

物語には「飛驒の匠の和田さま」という人物が登場する。久津八幡神社の記録について、『萩原町史第一巻』には、万治2（1659）年の金森頼直の葺上棟札の記録(右)が紹介されている。

民話と史料を合わせて考えると、和田様とは檐（ひさし）の口作物を作った高山の葺師「和田門平」だと思われる。他の資料を調べたが、これ以外の情報を確認することはできなかった。今後、他の史料での確認と研究を進めたい。



三月十六日ヨリ四月晦日成就	奉行田口弥三郎俊成	奉修理葛宮上葺	飛州太守金森頼直公	□□柴田又兵衛	口作物御扶□人和田門平	同高山ヨリ葺師五人来則檐	棟梁 藤原柴田又兵衛	尾州名古屋ヨリ五人来	萬治貳己亥年 葺師
---------------	-----------	---------	-----------	---------	-------------	--------------	------------	------------	-----------